

視察・研修報告（復命）書

三次市議会議長 様

報告者氏名 徳岡真紀

下記のとおり、視察・研修が終了したので報告します。

会派代表者氏名 掛田勝彦

経理責任者氏名 増田誠宏

期 間	令和 7 年 1 月 14 日(火)
用 務 先	私立 安田女子高等学校
用 務	安田女子中学高等学校 ルールメイキングプロジェクト視察
概要及び所見 (目的, 参考 にすべき事項, 提言, 活用 策等)	私の母校でもある、「安田女子中学高等学校」では、学校の校則の改定に生徒自らが取り組んだ事例ということで、これまで子どもたちの声をもとに一般質問で取り上げた事案についてさらに深く掘り下げ、実際にどのように校則を変えることができたのか、さらに変えた後の効果等について研修すべく、ひろしま議員女子会のメンバーである尾道市議会村井あつこ議員、安芸太田町議会影井いくみ議員、そして、山口県熊毛郡平生町議会の原まき議員と共に視察研修した。 1. 概要 安田女子中学高等学校では、2021年4月にNPOカタリバ「当事者意識を持った子どもたちを育てる」という理念のもと、生徒主体のルールづくりを進める「ルールメイキングプロジェクト」に取り組んでいる。本取り組みは、校則の見直しを通じて、生徒の主体性や対話力を育てることを目的としている。 2. プロジェクトの背景と目的 本校は元来、校則が厳格な学校として知られており、多くの生徒が長年にわたってその改善を望んでいた。初年度には、携帯電話の使用、下校時の立ち寄り、保護者同伴での外出といった制限の緩和を生徒自身が要望し、保護者からも大きな反対はなかった。

本プロジェクトでは、「生徒が決める」のではなく、「生徒の声を学校が受け止め、対話を通じて変化をつくる」ことを重視している。これは従来のトップダウン的な指導ではなく、対話と共創に基づく新たな教育の在り方を体現する取り組みである。

3. 取り組み内容と経過

- ・ 初年度(1 年目)

経済産業省の「2020 年度未来の教室実証事業」において NPO 法人カタリバが行った「ルールメイカー育成プロジェクト」のモデル校の一つとして選ばれた。全国でブラック校則の見直し機運が高まり、同様の取り組みを行う学校が増加(3 校→20 校)。四月に生徒ら 20 名で有志メンバーをつくり、中1、高1 を除いた全校生徒に校則やルールについてアンケートをとってみると、80%以上が「校則を改善したい」という意見だとわかったことから、プロジェクトを始める。

先生や保護者、弁護士などに意見を聞きながら、髪型や通学かばんの自由化、下校後の補食提供など、具体的な制度変更を実施。

- ・ 委員会活動との連携

高校では生活委員会、中学校では委員会活動を通じてルールメイキングを推進。特に中学生のメンバーは無邪気な発想を大切にしており、「まねごと」から始める実践を重ねている。

- ・ 対話と合意形成

対話のプロセスを重視し、机上の空論にとどまらず、実効性のある検証も行っている。半年をかけて丁寧に合意形成を進める体制が取られている。

- ・ 高校生の活動の広がり

ルールメイキングをきっかけに、探究活動や地域連携、ボランティアへの参加など、当事者意識を持った行動が拡大。また、先生以外にも弁護士などの大人とも協議したことは非常に大きな経験になっている。

4. 成果と課題

【成果】

- ・ 携帯電話の使用自由化などの校則緩和が定着し、かつ生徒の自律性が維持されている。
- ・ 生徒が当事者として学校生活の改善に関わる機会が増え、主体性が育まれている。
- ・ いじめやトラブルの抑制につながっており、自分の意見を言う力、他者の意見を聞く力の向上が見られる。
- ・ 生徒と教員という二極での取り組みではなく、NPO や弁護士などの大人が間に入ってくれることで対立を防ぐことができた。

【課題】

- ・ プロジェクトを持続可能な形にするには、教員側の意識改革と支援体制の強化が必要。
- ・ 特定の委員会や活動に依存しすぎず、学校全体としての取り組みに昇華させていく必要がある。

	・ 中学生への手法の継承や、対話の質をどう高めていくかが今後の鍵。 ・ 保護者や地域との協働のあり方も再検討する必要がある。 5. 提言、活用策 「ルールメイキング」という行為そのものを目的とするのではなく、生徒が自らの意見を持ち、表現し、対話を通じて社会や学校に働きかける姿勢を育てるための教育的仕組みとして取り組む方法を再度あきらめず、議会でも提案していく必要性を感じた。民主主義を成熟させるためにも、中学生時から自分で考え自分で実行し、提案、交渉、実現という成功体験を積むことがこれからの社会を生きる中での非常に大切であると考えます。 デザイン思考やワークショップなどの手法を授業にも活用し、学校全体で子どもたちの主体的な学びを支える体制構築が必要である。生徒・教員・保護者・地域を巻き込んだこれまでのあたりまえを見直し、現代版の「三方よし」の学校づくりに向けたさらなる深化を提案する必要があると改めて強く感じた。
--	---

